

# 第3章 ディスカッション・各グループのレポート

## 1 教育グループ

ファシリテーター：Mr. Aaron G. Laylo

PY：29名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

教育分野における地域連携を促すうえで最適な革新的アプローチとはどのようなものか。変化の担い手である青年が中身の伴った変革に向けて地域連携を更に洗練させられることに主眼を置く。

### (2) 事前課題

#### 国別課題

以下について、自国の文脈に即して情報収集を行うこと。

- 青年に関する情報(人口、年齢分布、比率などの主要情報のみ)
- 教育制度の現況(概要を報告できる形式で)
- 教育制度にみられる主な変化(抜け穴、資源、スキルなど)

#### <ガイドライン>

- 本ディスカッション・グループ(DG)で議論するのに興味深いと自分が考える要素のみ扱うこと(比較分析、事例研究、プロジェクトの候補例など)。
- 明瞭かつ簡約で、一貫性、創造性があるように(短く、簡潔に)。
- パワーポイント資料5枚で簡潔なもの(視覚情報や数値の方が、ただの長文より望ましい)
- 各参加国がDG全体に対しパワーポイントで共有を行うのは2分間のみ。
- 初日のディスカッションのため、以下を通読すること。  
“<https://www.un.org/sustainabledevelopment/youth/>”

### (3) 活動内容

各回における活動内容は、学びのつながりと時間管理を見据えて別日に移動させることがあった。各活動内容についてはそのねらいを本報告書に記載しているが、これらは日を跨いで分散・重複して実施しており、ディスカッション・トピックの主眼に即したものとなっている。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- 日本及び東南アジアにおける青年の概要をまとめる。

- 社会で若者がぶつかる障壁は何か。
- 日本及び東南アジアにおける教育の概況(制度、構造、政策、文化)を比較・分析する。

##### 活動

- DGの題目及び事業の目的について説明した。
- 教育分野における変化の担い手である青年の役割を明確にする際の前提として、国際連合が定めた青年についての概要を説明した。

##### 成果

- PYは、a) 教育という主題、b) 毎回のディスカッションがどのように行われていくのか、c) PYは何を期待されているのか、について大意をつかむことができた。
- 自己紹介を通じて、互いの人となりを知り合うようになった。
- 世界的に見た青年と教育の現況について、大局的にとらえることができるようになった。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- 関連資料に目を通す。
- 教育の3Cについて議論する。

##### 活動

- 主なポイントや活動について再確認し、何に取り組み、成果として何が期待されるか説明が行われた。
- 自国の青年と教育制度の現況に関する報告を行うという事前課題について、参加国ごとに簡潔に共有された。
- 主題に沿って、3つの混成グループに分かれ、コーナーストーン(教育の基礎要素)、チャレンジ(21世紀の教育)、コラボレーション(多分野間)という主なポイントについて議論した。
- まとめや結論付け、振り返りを行った。

##### 成果

- 日本及び東南アジアにおける青年と教育の現況について学んだ。また、助言に即してPYは、与えられた時間内でプレゼンテーションを行おうと、時間管

理、秩序立った議論の運び、全体への気の遣い方などのスキルを身に付けることもできた。

- b. PYはブレイクアウトルームに割り振られて、教育のコーナーストーン、チャレンジ、コラボレーションについて話し合い、学ぶことができた。

### グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

- a. 教育の異なるレベルや領域におけるコラボレーションを促進する、日本及び東南アジアのプログラムを立案する。
  - b. ハイレベルな（複数国の意思決定者間での）地域会議をシミュレーションする。
- ※ 上記のねらいは、セッション3及び5についても包含する。日本及び東南アジアにおける地域会議のシミュレーションに関する議論や準備が行われたが、実施自体はセッション5で行われた。

#### 活動

- a. 主なポイントや活動について再確認し、何に取り組み、成果として何が期待されるか説明が行われた。
- b. 各混成チームの代表者が、それぞれのチームで行われた議論において特筆すべき点を全体に共有した後、その結論やプレゼンテーションについて自由に議論する時間が設けられた。
- c. 参加国ごとに分かれて、国際連合による持続可能な開発目標（SDGs）の目標4「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」という観点に基づき、改善余地のある領域を3つ定めた。そのうえで、最終的にはそれぞれの参加国において実現が理想とされるプロジェクトを考案・提案した。

#### 成果

- a. 教育の3Cに関する議論で主となる興味深い領域について学ぶことができた。
- b. SDGsの目標4に関して鍵となる問題を見つけるという国別課題に資すると同時に自国の文脈に即した、特定の問題について分析することができた。

### グループ・ディスカッションIV

#### ねらい

既存の型にとらわれないアイデアに対して傾聴し、採り、議論する（教育とコラボレーション、イノベーションを繋げる）。

#### 活動

- a. 主なポイントの確認、ゲストスピーカー紹介
- b. ゲストスピーカー講義
- c. 質疑応答
- d. まとめや結論付け、振り返り

### <ゲストスピーカー講義>

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Eduardo E. Mendoza Jr. — 教育起業家/ホームスクール・グローバル代表/ABSCBNニュース番組の前アンカー

トピック：学びの概観

#### 講義から学んだこと

イノベーションやコラボレーションに着目すると、教育を取り巻く環境が変化してきており、その様子について見て取れる点が3つあるとの講義を受けた。

- a. 学びが根本から変化している

教授法、学習法、学習環境について根本的な変化が起きている。教育業界ではこの3点が取って替わられているのがより一層顕著になってきており、講義主体の教師でなくファシリテーター、ただの生徒ではなく積極的に参加する学習者、より学びに資する環境、が台頭している。

- b. 家庭の価値

親と教師の連携がより強調されるようになってきている。学びは、家庭における親からの教育に始まる。教育機関の役割は、技術的かつ土台となるようなカリキュラム学習の手法を提供して、学習者の教育上の成長や進歩を目指して足場を組むことにある。

- c. トランザクショナル（取引型）教育 対 トランスフォーマーショナル（変革型）教育

生徒が単なる「聞き手」であるトランザクショナル（取引型）な手法は徐々に衰退しており、トランスフォーマーショナル（変革型）は教室内部にとどまらないものである。

### グループ・ディスカッションV

#### ねらい

- a. 教育において、また教育を通じて、青年が変革を引き起こせる実践的な方法や手段を見つける。
- b. 行動計画やプレゼンテーションの実践を通して、解決策を提案する。

#### 活動

- a. 主なポイントや活動について再確認し、何に取り組み、何が成果として期待されるか説明が行われた。
- b. ASEAN+1会議 — アイデア、提案、政策論点についてプレゼンテーションを行った。参加国ごとに1人ずつ、自国で実現が望まれるプロジェクトについて発表し、それに対してPYたちからは良い点と改善点についてフィードバックがなされた。
- c. 主要なディスカッションの結果を統合した。
- d. まとめや結論付け、振り返り

#### 成果

- a. 教育分野におけるコラボレーションに向けた、革新的な地域プロジェクトを提案・発表することができた。
- b. プロジェクトの立案をするうえで実行を易しくするためのSMARTメソッドが重要であることを学ん

だ。イノベーションとコラボレーションは、国にかかわらず、教育では必須な観点であると知った。

#### (4) 成果報告

- a. 5名がDGを代表して成果報告を行ったが、ファシリテーターの助言に即して、事業期間中に何をしたかを共有するよりも、テーマの命題に答えることに注力した。
- b. a) 参考資料の提供をより一層行い、b)文化交流を促進するという目的を掲げた「教育目的で使用するワンストップ・オンライン・ポータル」プロジェクトが提案・発表された。
- c. セッション中に繰り返し強調されてきた、教育とイノベーションとコラボレーションの連携が、上記提案では反映されている。
- d. その後、セッション中の活動の様子が垣間見られるような紹介に移った。
- e. 発表後は、5分間の質疑応答となり、他のDGのPYから多くの質問がなされた。

#### (5) PYの声

- 教育の課題を理解するためには、自らが誰のために教育を改善したいのかを考察・内省することが重要だ。(匿名)
- 教育におけるコラボレーションは、テクノロジーによってより効率的になる。しかしながら、テクノロジーを伴わない教育のコラボレーションであっても、それは人間と人間のつながりや情熱、共感を深め、この主題について学び、有用なプロジェクトを構築するうえでの興味を湧かせる素地となる。(シンガポールPY)
- どうすれば子供たちが最もよく学べるかというのは、どうすれば従業員がよい成果を上げられるかというのと全く同じだと考える。ここで得られた8つのコツは、子供にとってのみならず、大人にとっても

大事であろう。(日本PY)

- チームワークが肝要だ。良い成果には全員の関わりが必要になる。我々は互いに助け合い、全ての意見に耳を傾け受け入れた、良いチームである。(タイPY)
- 我々は、チームワークDG1である。2022年度SSEAYPには初日から最終日に至るまで、心から感謝している。ファシリテーターは我々に対して全面的に支え、分かち合ってくれた。(ラオスPY)

#### (6) ファシリテーター所感

SSEAYPのディスカッション・グループをファシリテートするのは私にとって今回が初めてだったが、DG1のクールなPYとその道を切り拓くことができ幸甚だ。他のDGのPYと時たまコラボレーションできたのは喜ばしかった。この地域全体で様々な教育課題がある中で、多面的で相互に入り組み幅広い教育の諸々の点を徹底的にまとめ上げることは、大きな挑戦だったかもしれない。それでも、PYが最も身近に感じられる必要不可欠な面に焦点を当てたのが一番有効的であった。多くのPYがチャットやブレイクアウトルームやWhatsAppアプリを通じて積極的に参加してくれた。PYがより頻繁に協働するにはグループ・ダイナミクスもまた極めて重要である。改善の余地というのは常に存在するものだが、それらを次の取組にも活かすことができたらと思っている。

## 2 災害と防災グループ

ファシリテーター：Ms. Risye Dwiyani

PY：30名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

災害へのレジリエンス(耐性)を高めるうえで、日本と東南アジアの青年にとって可能な道筋は何であろうか。

### (2) 事前課題

#### 個人課題

- www.preventionweb.netから選定された文献を読んで、レジリエンス、災害リスク、仙台防災枠組の考え方を理解する。
- 「2045年の地球」に関する自らの展望を描くことを通じて、自己紹介を行う。

#### 国別課題

各国の災害事例に基づき、(a)その根源となるハザード(危険性)、脆弱性、危険への暴露 (b)より望ましい復興のためには何がなされなければならないか、について定義する。

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- 災害レジリエンス関連の概念について理解をまとめる。
- 災害レジリエンスを高めるうえで、いかなる背景の青年も役割を持てるという認識を喚起する。

##### 活動

- 真面目なゲームを用いた、防災やレジリエンスの概念に関する議論
- 災害レジリエンスは誰にとっても自分事であることについて、小グループごとの活動

##### 成果

- ハザード(危険性)、脆弱性、暴露、リスク、防災、レジリエンスといった概念の区別ができ、どのように実際の各国における災害事例で適用されるか知ることができた。
- 減災や準備態勢に関する詳細な事例や、緊急時の意思決定に働く力学について学んだ。
- 分野を横断したコラボレーションを通して、いかなる背景の青年でも災害レジリエンスに貢献できるという認識を得た。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- インクルーシブな防災実践とその課題について学ぶ。
- いかに青年がインクルーシブな防災実践を強化でき

るか、案出しを行う。

##### 活動

- 障害を持った人々や社会的弱者の集団に対して行う、人権に根差したアプローチをファシリテーターが紹介した。
- (a) 障害についての動画、(b) 各国における障害をも包括した共生的な防災事例に目を通すという事前課題からの主な学びについて、小グループに分かれて話し合った。
- 残りの時間では、振り返りと、新しいグループ分け(4グループ)を行った。

##### 成果

- 障害の概念、障害と災害レジリエンスのつながり、障害を持った人々における多様性についての認識が得られた。
- 防災の立案をする際に、社会的弱者の集団に対して気が向けられていた。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

- 日本及び東南アジアにおける、国境を越えた防災の取組やそれらの課題について学ぶ。
- 国境を越えた防災の取組を青年がいかに強化できるか案出しを行う。

##### 活動

- (事前課題で得られた結果に基づく) アジア太平洋地域の国境を越えた災害リスクに関する事例について、4つのグループによる、各3分間の発表
- ゲストスピーカーによる講義とディスカッション

##### 成果

- 災害リスクは国境を越えたものであることから、国境を越えた協力というのが必須であることを学んだ。
- メコン川流域の生態系における国境を越えたリスクや、太平洋北東部やインド洋における水文気象学的リスクについて述べるようになった。

#### <ゲストスピーカー講義>

ゲストスピーカー氏名・所属：Dr. Mizan Bustanul Fuady Bisri

トピック：日本及び東南アジアにおける国境を越えた防災事業

##### 講義から学んだこと

多くの日本及び東南アジアにおける防災に関する政策や事業について、官民を問わず、青年主導のものも含

め、知ることができた。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

災害レジリエンスを強化するためのコラボレーション計画を立てる一環として、アイデア出しを行う。

##### 活動

- 災害レジリエンスに対して付加価値を与える青年ならではの特性や可能性についての事前課題に基づく、大まかな議論
- 小グループに分かれて、(i)事後活動に向けた意見交換、(ii)ミッションについて共有・合意
- 共有ミッションについて2分間の提案
- ステークホルダー・マッピングのツールについてファシリテーターによる紹介

##### 成果

- 災害レジリエンスを増すうえで付加価値となる青年ならではの特性に焦点を当て、それがどのようなものなのかを認識できた。
- より一層強化されるべき災害レジリエンスに関する実践について分析し、異なる考え方がある中で立案を行い、集団としての意思決定をしたが、これらを通じて各自のスキルを発揮することができた。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- 災害レジリエンスを強化するうえで自分たちが取り組むことのできる資源をマッピングする。
- 道筋や実現可能な行動を立てる。

##### 活動

- 小グループに分かれて、(a)事前課題の結果をまとめた(合意されたミッションを達成するために、利害関係者が誰で、どのようなパワー/インタレスト・グリッドが働くか)。また、(b)優先度の高い利害関係者に組み合わせるための戦略を練った。
- 議論の後、各グループ3分間の発表を行った。

##### 成果

- PYのミッションに近い興味関心を持っている可能性がある日本及び東南アジアにおける多様な利害関係者についての認識を深めることができた。
- パワー/インタレスト・グリッドのツールを用いて利害関係者に処していく戦略を立てることができた。

#### (4) 成果報告

発表は、DG2のマイルストーン、結果と得られた学びについて焦点が当てられた。主だったものとしては、(a) DGセッションを通じて探った、災害に強い社会を実現するための道筋、(b)特に深堀をした議題、(c)実際に行った協同して計画を立てる手法が挙げられる。

発表者の3名(マレーシアPY、カンボジアPY、シンガポールPY)は、合意された採用基準に沿ってDGから選出された。この3名は素晴らしいチームワークを主導し、全員で作り上げたディスカッションツールを用いて、発表のリハーサルでPYがフィードバックできるようにしてくれた。

#### (5) PYの声

最初の4セッションが終了するまでに、異なるPYの報告者から書面によるフィードバックを得ており、セッション6の前には、Googleフォームを通じて全てのPYからフィードバックを得ている。以下はその抜粋である。

#### PYにとって最も有用だったセッション (n=23)

- セッション2：インクルーシブな防災 (34.8%)

「この事業に参加するまでは、障害者の直面する脅威について考えたこともなく、防災における政策や試みにおいて、マイノリティの存在が軽視されている状況が多々あることを知りました。また、DGの他のメンバーと議論することで、東南アジアにおける防災教育にギャップがあること、効果的な防災対策を提起することで2次被害を軽減する必要があることを再認識することができました。」

- セッション3：国境を越えたりスク (26.1%)

「セッション3は私にとって大変印象深く、この問題に急に興味を持つようになりました。事前課題から、国境を越えたりスクを防ぐための国際協力、特にメコン地域について多くを学びました。このような課題を出していただき、また、この地域のPYとのグループ分けをしていただき、ありがとうございました。最後に、今回のセッションで、防災が身近にあること、そして防災を深く学ぶことが自分自身とコミュニティのためになることを学びました。」

- セッション5：パワー/インタレスト・グリッドと実現可能な行動(21.7%)

「セッション5が一番役に立ちました。お互いに打ち解け、包括的に意見を出し合い、実現可能な行動を生み出すことができたからです。この事業に参加して初めて、現実的でない解決策を100個並べるよりも、実現可能な解決策を作ることが重要であることに気づきました。このセッションはとても有益で、私の知識を広げてくれました。利害関係者を適切な順番で並べることで、解決策がより明確になり、実現可能性が高まります。」

#### 期待していた学びと実際

「我々東南アジアにおける防災に関する情報をもっと共有し、他の国にも応用できるような文脈のある学び(を期待していました)。」

「ディスカッションが始まる前は、自分達が洪水から

どのように生き延びるかといった、非常に単純なことを学ぶことを期待していましたが、この国際的な議論の場においてそれは簡単すぎるということに気づかされました。基本的な枠組みから、自分一人が生き延びるだけでなく、地域の一人としてリスクや被害を減らすため防災にどう貢献できるかを学ぶことができ、本当によかったと思います。」

#### 苦勞した点 (報告者の観点によるものからまとめた)

- ・ 議論内容以外：言語の壁、コミュニケーション、インターネット接続、グループワークを必要とする課題に対する時間管理
- ・ 議論の中身：議題に対する知識が限定的だった。

#### (6) ファシリテーター所感

このような機会を与えてくださった内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、SSEAYP国際ナショナル・インドネシアに感謝申し上げます。また、素晴らしいアイデアを提供してくれたファシリテーターの同僚、そして、世界は素晴らしい手や心によって支えられていると確信させてくれた愛すべきPYに、心から感謝している。

以下は、DG2のファシリテーションの中で、今後の事業に役立つと思われるいくつかの覚え書きである。

災害、リスク、レジリエンスは日常的な話題としてあまり語られることはない。そのため、各セッションは、これらに対する異なるレベルの理解度に合うよう設計されている。災害に対するレジリエンスの基本的な概念

を理解し、仙台防災枠組のようなグローバルなコミットメントの実施に関するギャップを知ることは、PYがギャップを埋めるべく主導していく上で重要であった。今年の場合、DG2は、障害者を含むインクルーシブな防災と国境を越えたリスクという、重要だがあまり語られていない2つのトピックについて議論した。

伝え方や運営方法も重要で、(i)専門的すぎず、特定のPYにとって簡単すぎないようにバランスを取ること、(ii)限られた時間の中で共に学ぶ機会を最適化すること、(iii)PYにグループの中でリーダーシップを発揮するのを促すこと、などが挙げられる。DG2では、Miroのような視覚的に共同作業を行えるツールの適切な利用法、各回1週間前に出される有意義な事前課題、簡単なテンプレートを使った異なる報告者による週報、PYのグループ分け、などの戦略がとられた。

最後に、途中で干渉せずそのままにしておき、実社会の課題である集団内でのグループダイナミクスを体験させてみることも必要だと考える。

## 3 起業 (NGO/NPO含む) グループ

ファシリテーター：Mr. Ari Yuda Laksana

PY：32名

#### (1) ディスカッション・トピックの論点

日本及び東南アジア各国の友好と協力のために、青年は起業家（アントレプレナー）としてどのように活躍し、社会の重要問題を解決することができるのか。

#### (2) 事前課題

##### 個人課題

PYは、インフォメーションペーパーに記載されている質問に答えることで、アントレプレナーシップと事業アイデアの関係について理解することに努めること。

##### 国別課題

各参加国のPYは、いかなる事業、NGO/NPO、個人の主導によっても解決されていない社会問題につき、イ

ンフォメーションペーパーに掲載されている資料でソーシャル・アントレプレナーシップについて学びながら、指示に即して、グループで話し合い、その結果をまとめること。

#### (3) 活動内容

##### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

アントレプレナーシップの概念を理解し、それが特に日本及び東南アジアにおける産業の変化にどのように影響するかを理解する。

##### 活動

- a. アントレプレナーシップについての導入となる議論

- b. 各国における産業の変化（傾向、課題、青年の関与）についてブレイクアウトルームに分かれて議論
- c. 青年が起業家として産業に影響を与えるうえで積極的な役割を担えるかをブレイクアウトルームに分かれて議論
- d. 議論からどのような示唆を得られたか、振り返り

#### 成果

- a. PYは、アントレプレナーと社内起業家（イントラプレナー）を区別し、その行動やアントレプレナーに必要な特徴について説明することができた。
- b. PYは、各国におけるパンデミックによる変化と、自分たちが成し得ると考える青年の役割について認識することができた。
- c. PYは、ユニコーン企業という言葉とその定義を知り、各国のユニコーン企業について詳しく学んだ。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- a. エフェクチュエーションとイノベーションという概念を理解する。
- b. 独自性のある事業を2つ作成してみる。

##### 活動

- a. ブレイクアウトルームに分かれて、エフェクチュエーションに関する議論を行った。
- b. エフェクチュエーションの法則を用いて、議論及びビジネス・アイデアを練った。
- c. 各国が抱える課題について議論し、PYが解決し得る共通問題を見つけた。
- d. 各国の共通事項を導き、ビジネス・アイデアを立案した。
- e. エフェクチュエーションの法則を用いて、自分（そして仲間）は何者なのかを問答した。

##### 成果

- a. エフェクチュエーションの法則の一つであるバードインハンドについて理解を深めた。こうした法則は熟練のアントレプレナーに見受けられるものではあるが、応用するのが難しいということではなく、アントレプレナーになりたいという意欲ある一般人にもできることである。
- b. 自身及びアントレプレナーに対しての理解を深めた。
- c. 各国の課題について学び、解決策を考案することができた。
- d. どのグループも、日本及び東南アジアの地域レベルで展開が可能なビジネス・アイデアを考案できた。
- e. 7グループから寄せられたビジネス・アイデアは実に実践的で現実味のあるものだった。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

- a. ビジネス・デザイン思考の概念を理解する。
- b. バリュープロポジション・デザインを用いて、提供価値をベースとした事業を見出す。

##### 活動

- a. ビジネス・デザイン思考に関するゲストスピーカーによる発表と議論
- b. ブレイクアウトルームに分かれて、JamboardのCanvasを用いて各グループのビジネス・アイデアのバリュープロポジションについて議論

##### 成果

- a. PYは、ビジネス・アイデアを完成させるうえで直面する諸々の問題を解決するためにどうすればいいのか理解を深めることができた。さらに、デザイン思考を実生活に応用することができ、そこから自分たちがまず何をすべきか、その後何をすべきかを理解することができた。
- b. PYは、顧客のペインとゲインについて詳しく学び、その知識に基づいて、顧客のゲインを生み出し、ペインを取り除くことができる製品・サービスを考案した。

##### <ゲストスピーカー講義>

ゲストスピーカー氏名・所属： Dr. Indrawan Nugroho, コーポレート・イノベーション・アジア (CIAS)創業者 CEO.

トピック：ビジネス・デザイン思考

##### 講義から学んだこと

- a. 根底にある課題を理解することで、より良い形で顧客と関わるようになる。
- b. 相手のペインを知るために、どのような質問を設計すればよいのか。
- c. ビジネス・デザイン思考で重要なステップは、オーディエンスや顧客とつながり、ユーザーとの共感を築くことである。
- d. 起業のリスクを減らす方法（ターゲット層、市場、要件などのより詳細な情報）を見つける。
- e. 批判的なものの考え方がスキルアップした。
- f. 失敗し、再出発するという心構えができた。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- a. 事業を始めることの課題と機会を知る。
- b. ビジネス・モデル・キャンバスを用いて、ビジネス・モデルを考案する。

##### 活動

- a. ブレイクアウトルームに分かれて、Miroのビジネス・モデル・キャンバスを用いて、9つのビルディング・ブロックで作業を行う。

- b. PYは、自分たちのビジネス・アイデアに対するフィードバックを得るために、他のDGのファシリテーターにインタビューを行い、その結果をグループメンバーで話し合った。

#### 成果

- a. 自分のビジネス・アイデアから何を売ろうとしているのかを考え、明確にすることができた。
- b. ビジネス・モデル・キャンパスを用いて、スタートアップのアイデアを実現する方法について学んだ。
- c. スタートアップの事業アイデアにみられる機会と課題について知ることができた。
- d. 異なる顧客や利害関係者への処方について学んだ。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

ビジネス・アイデアを売り込むピッチングスキルを発揮する。

##### 活動

- a. PYは、自らのグループのビジネス・アイデアを発表した。
- b. 各ビジネス・アイデアに対して、PYからコメントや質問、批評がなされた。

##### 成果

- a. ビジネス・ピッチとプレゼンテーションに関する自信とスキルを向上させることができた。
- b. 各グループはビジネス・アイデアを改善・強化することができた。
- c. チームで動くという精神と、PY間の絆が強まった。
- d. 創造的かつ批判的なものの考え方を研ぎ澄まし、いくつかのビジネス・アイデアについて案出しができた。
- e. ビジネス・アイデアを効果的かつ効率的に調整する術を身につけることができた。
- f. 様々な人々や組織からのフィードバックやアドバイスが、起業家の考え方を成長させることが学べた。

#### (4) 成果報告

発表と質疑応答の両方を15分間という枠の中に収めて、非常にうまく行うことができた。発表の中身は、以下に対して回答したものとなっている。

- ディスカッション・テーマの論点「日本及び東南アジア各国の友好と協力のために、青年はアントレプレナーとしてどのように活躍し、社会の重要問題を解決することができるのか」に対する回答
- PYの出した結論は何か。
- まとめと行動計画

発表は日本、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシアのPYによって行われたが、このディスカッションによって、7つのしっかりしたビジネス・アイデアを携え、起業に関する実践的なスキルと態度の面で向

上したと結論づけた。今後さらに同窓組織や自身のコミュニティを通じて経験やネットワークを強化していくと述べた。

#### (5) PYの声

- DG3は、開発分野で働く者として私の現在の仕事に応用できる多くの示唆を与えてくれました。特に、国内で先住民のために、そして先住民とともに社会起業家プログラムを実施するにあたっての、私の知識を増やし、視野を広げることができました。さらに、様々な文脈、文化、背景を持つ他のPYと協働し、対話する機会を与えてくれました。
- DG3のメンバーとして、アントレプレナーシップについて多くの新しい学びを得ることができました。また、チームとしてビジネス・アイデアに取り組むことは、本当に大変でしたが、とても魅力的でした。毎週多くの課題もありましたが、もう皆さんに会いたくなっています。このような素晴らしいアントレプレナーシップを持ったメンバーと知り合えたことに、とても感謝しています。これからもっともつとアントレプレナーシップを養いたいと思います。
- フィールドワークや出張が多い私には、課題が大変すぎて、全てをこなすことはできませんでした。そのため、罪悪感を払拭すべく、セッション中は積極的に参加しました。
- 強いアントレプレナーシップを持ったメンバーとのつながりは貴重でした。また、短期間でのビジネスピッチングのデモプレイは、大変でしたが魅力的でした。
- ビジネスについて深く学ぶことができ、チームメイトとアイデアを共有し、お互いを知ることができました。セッションを通して、多くのことを学びました。ただ、もっと議論する時間が欲しいし、異なる背景や異なる国の人たちと更に知り合って、より一層アイデアを交換したいです。

#### (6) ファシリテーター所感

嬉しいことに、バーチャル・セッションを通してディスカッションの目的を達成するべくあれこれ苦慮したことはすべて報われた。各回とも理想的なディスカッショ

ンを行うには限られた時間であったが、蓋を開ければPYは、実りある経験をし、実践的な知識を増やすことができた、肯定的な感想を述べている。ただ、更に時間があれば、PYがもっとお互いを知り、より深いディスカッションができるようなアクティビティや、ビジネス・アイデアを実際に試行できたなどは、改善の余地が

あるだろう。結びとして、「東南アジア青年の船」青年会議のディスカッション・プログラムに対してより一層の貢献を、私にファシリテーターとして任せていただいた内閣府及び一般財団法人青少年国際交流推進センターに感謝申し上げたい。

## 4 健康とウェルビーイング(メンタルヘルス含む)グループ

ファシリテーター：Mr. Berzenn Urbi

PY：30名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

日本及び東南アジアにおける健康とウェルビーイングを青年はいかに押し広げられるだろうか。

### (2) 事前課題

PYは、グループ・ディスカッションIVに先立ち、自国で現在実施されている精神衛生に関する任意の政策を検討した。なぜこの政策が作られたのか、そのプログラムによって利益を得ているのは誰か、そのプログラムの評価はされているか、どのように改善することができるか等である。PYは、グループ・ディスカッションIVで、自分たちが選んだ政策について話し合った。

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- 良好な健康についての基本的な定義を理解する。
- 精神衛生や疾患に関する基本知識を得る。

##### 活動

- 世界保健機関（WHO）によれば何をもちょう良好な健康とするかについて議論した。
- 精神衛生や精神疾患とは何かについて議論した。
- コロナが人々の精神衛生にどう影響したか、小さいグループに分かれて議論した。各自が、コロナが自身の精神衛生に対してどう作用したかを話し合った。
- アクティビティ1：個人での振り返りと自己愛について

##### 成果

- WHOの定義する「良好な健康」とは何か、心の病とは何かという基本的な理解を得た。
- 他人を助けるために自分を大切にすること、つまり、まず自分のコップを満たしてから他人のコップを満たす重要性に気が付いた。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- 精神疾患に対する知識を更に得る。
- 精神疾患にまつわる偏見に対処する重要性を理解する。

##### 活動

- 精神疾患の異なる種別に関して議論した。
- ブレイクアウトルームに分かれて、不安障害とは何か、不安障害に悩む経験はどういうものであろうか、小グループごとに議論した。
- 「不安アクティビティ」を行った。この活動は、不安障害を抱える人がどのように感じ、どのようにものが見えるかを参加青年に理解させるきっかけとなった。最後に、参加者はこの活動から得た経験をまとめた。
- 「大丈夫ですか」といった会話の重要性について議論した。

##### 成果

- 異なる精神疾患についてより一層の気付きを得た。
- 不安を抱えて生きる人々についての共感を得た。
- 「大丈夫ですか」といった会話を用いて状態を確認することの大切さを学んだ。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

健康とウェルビーイング全体における社会的なつながりの重要性について理解する。

##### 活動

- 精神疾患を取り巻く種々の問題について討議した。
- 「あなたの持つ価値観」アクティビティ。ディスカッション中に与えられた一覧表にある価値観を選択し、ブレイクアウトルームに分かれて、議論した。
- 「感謝」アクティビティ。感謝を伝えたいが自分が未だそうしていない相手に向けて感謝状を書いた。本事業後に、それを送ったり伝えたりすることが推奨された。
- 親密な関係や幸福と精神衛生に関するハーバード大

学の研究について議論した。

#### 成果

- a. 自分自身にとってどういった価値観が大事なのか、気付きを得た。
- b. 良好で親密な繋がりや質の高い関係性の大切さについて学んだ。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- a. 精神衛生の問題に対して、日本及び東南アジアにおける異なる政策について学ぶ。
- b. ウェルビーイング全体に対する身体、社会と精神の関連性を理解する。

##### 活動

- a. 課題1（個人）の発表。発表された精神衛生に関する政策への批評を小グループに分かれて行った。
- b. ウェルビーイング全体に対する身体、社会と精神の健康が持つ重要性について議論した。BACE戦略(身体のケア、達成感、他者とのつながり、楽しみ)についての議論を行った。

#### 成果

- a. PYは、日本及び東南アジアにおける精神衛生に関する政策の違いについて、より深い洞察を得ることができた。ある国が精神衛生問題に取り組むために積極的に資金提供をしている一方で、他の国は同様の問題に取り組むための資源が不足していることに課題を感じた。
- b. BACEセルフケア戦略を通じて、自分の身体的、社会的、精神的な健康を管理するための手立てについて理解した。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- a. 特に青年にとっての、孤独にまつわる問題について理解を深める。
- b. 社会的なつながりの重要性についてより多くの気付きを得る。

##### 活動

- a. ブレイクアウトルームに分かれて、PYは孤独に対処するために自分たちが簡単にできる手立てについて話し合うという課題を与えられた。友人や家族に連絡をとること、傍にいること、共感すること、コミュニティの一員であること、などが例に挙がり、共有された。
- b. 本事業で最も交流の深かったPYを褒める手紙を書くという課題に取り組んだ。これは、本事業で既に結ばれた社会的つながりを高めるためのものである。

#### 成果

- a. 自分自身にもできる、孤独に悩む人々への介入方法を

を体得した。

- b. 本事業で、誰かとつながることの大切さ、ネットワークと友情の重要性を理解した。このことが全体的なウェルビーイングを高めることに寄与する。

#### (4) 成果報告

- a. 日本及び東南アジアにおける様々な精神衛生に関する問題と政策について発表した。また、精神衛生を含む、良好な健康やウェルビーイングにとって、良質な人間関係の価値や社会とのつながりの重要性についても言及された。
- b. 遠距離ながら効果的にコミュニケーションをとり、互いにつながることができた。
- c. オンラインプラットフォームを通じて、報告会の中身の準備とスライドのデザインを行い、時間を管理しながらチームとして動く方法を学んだ。さらに、プレゼンテーション終了後の質疑応答では、チーム内で互いに助け合うことができた。

#### (5) PYの声

- 当初、母国語ではないので緊張し、良い発音で流暢に話すことが大切だと考えていました。しかし、親切なメンバー達と話すうちに、「大丈夫ですか」と声をかけるなど、相手を思いやる気持ちの方が大切だと気づきました。ウェルビーイングや精神衛生について、とても勉強になりました。そして、今も元気に仲間とセッションを楽しんでいることに幸せを感じました。これからは人間関係を大切に、PYと連絡を取り合い、良好な精神衛生を保っていこうと思いました。また、政策で精神衛生を考慮することが重要であると学びました。「誰一人取り残さない」という言葉は、人との関わりや精神衛生を考える上で欠かせない要素だと思い至り、私の好きな言葉になりました。素晴らしいDG4セッションをありがとうございました！本当に楽しいです!!!!
- このDGに参加し、様々な立場の人々と出会えたことに、感謝の念を禁じ得ません。私はテーマについて学ぶだけでなく、自分の人生や洞察を分かち合ってくれたPYたちからも学びました。幸せで光栄であるとはか言えません。このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。
- この素晴らしいDG4のメンバーとして参加できたことを光栄に思います。打ち明けると、複数国から集った参加者と英語でディスカッションするのは初めてでした。最初はとても緊張しましたが、ファシリテーターと仲間たちのおかげで6セッションを通して楽しく活動することができました。精神衛生も含め、ウェルビーイングについて多くのヒントを得たので、これからの人生をより良いものにしていき

たいと思います。また、素晴らしい仲間たちとは今後も必ず連絡を取り合います。

- 日本及び東南アジアの人々と知り合う機会を与えていただき、とても有意義なコース・ディスカッションでした。このコースに参加したことで、自分自身をより深く理解することができ、とても嬉しいです。
- この事業は本当に楽しかったです。とても面白く、素晴らしいものでした。さらに、ウェルビーイングや精神衛生に関する多くの考えや新しい概念を得ることができました。それに加えて、PY同士の素晴らしいディスカッションで、自分たちの文化を共有することができました。さらに、ファシリテーターのZennさんはとても親しみやすく手助けをしてくれました。また、DGのPYもとても親切でフレンドリーです。事業が終了しても、できた新しい友達と、オンラインプラットフォームでつながっています。

## (6) ファシリテーター所感

このネットワークの一員であることは、いつも身の引き締まる思いです。新たにPYを導き、鼓舞する機会を得たことに感謝しています。内閣府の皆様、ありがとうございました。

DG4のファシリテートを楽しみました。PYはとても熱心に議論してくれ、私もPYから多くを学びました。素晴らしい思い出をありがとうございました。

## 5 情報とメディアグループ

ファシリテーター：Mr. Jed Senthil K Jivaraju

PY：29名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

日本と東南アジアの友好・協力関係が50周年を迎える一歩として、今日における情報とメディアの力を活用しよう。

- メディアとは何か、そして我々はいかにメディアに対してリテラシーを持ち得るだろうか。
- メディアを取り巻く利害関係者及びあなた自身は、メディアの現況をどう活用できるだろうか。
- 社会的課題を解決するためのデジタルメディアキャンペーンを実行するにあたって、何が重要な戦略やステップとなるだろうか。
- 日本及び東南アジアはいかにメディアや情報ツールを用いて、社会課題に対峙し、社会的認知を生むことができるだろうか。

### (2) 事前課題

- 効果的な広告：広告でメディアのタイプ（テレビ/ラジオ、印刷物/オンライン）を1つ選び、効果的な広告となった理由を分析する。
- 人気番組：自国で人気のテレビ・ラジオ番組で多くの人々の支持を集め、高視聴率を得ている、流行を生み出しているものを1つ選び、その魅力の原因を分析する。

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- メディアとは何かを知る。
- 人気メディアが社会に与える影響について理解する。

##### 活動

- 効果的なテレビ・ラジオまたは印刷広告の分析を行った個人課題について発表した。
- 自国で人気のテレビ・ラジオ番組で多くの人々の支持を集め、高視聴率を得ている、流行を生み出しているものについて発表し、その魅力の原因を分析した。

##### 成果

PYは、コミュニケーションの目的を、主には、知らせること、説得すること、楽しませること、とした。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- メディア・リテラシーの概念を理解する。
- 受け手として情報の取捨選択の方法を大別する。

##### 活動

- 異なる視座や解釈を持つニュースのサンプルについて分析を行った（世界的な報道メディアによる、シンガポールの麻薬密輸に関する法律についての

ニュース記事が、ファシリテーターにより配布された)。

- b. いかにか批判的に吟味して信頼に足る情報を得るか、またいかにかメディアのバイアス、偏向報道、アジェンダ設定を認識するかについて共有した。
- c. メディアの功罪、メディアの倫理的な使用方法について話し合った。

#### 成果

- a. バランスをとるのは容易でないが、メディアが客観的で公正でなければならないことを理解した。
- b. どのニュースメディアにもそれぞれのアジェンダがあり、それゆえ、目にしたすべての情報を分析するメディア・リテラシーの重要性を理解した。

### グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

- a. 様々なメディア・ツールを紹介する。
- b. いかにか異なる社会グループが異なるメディアの使い方をするかを比較する。
- c. 市民ジャーナリズムの短い動画を制作する。

#### 活動

- a. 政府、メディア、民間や公共機関が、様々な形態のメディアを使ってどのように情報を発信しているかについて分析し、政府による既存の規制があるかどうかを議論した。
- b. 報道機関の負う責任について学んだ。
- c. 人々がメッセージを伝えるために、いかにか積極的かつ効果的にメディアを利用すべきか共有した。
- d. 市民ジャーナリズム、ニュースリリースや報道機関への声掛けについて学んだ。

#### 成果

- a. 政府、民間企業、一般市民、メディア所有者など、主要な利害関係者がメディア空間をどのように活用しているかを学んだ。
- b. 今日のメディアを通じて出会った社会問題について、1分30秒の市民ジャーナリズム動画を共同制作した(例: キャンセル・カルチャー、その他ファシリテーターが提供したもの)。

### グループ・ディスカッションIV

#### ねらい

- a. メディアの発展が人々の情報生成、発信、取得の方法にどのような影響を与えるかを認識する。
- b. ソーシャルメディアで社会運動を促す方法について比較する。

#### 活動

##### <ゲストスピーカー講義>

ゲストスピーカー氏名・所属 : Mr. Ng Chenghan Josiah, マザーシップ、シニア・エグゼクティブ・プロデューサー

トピック : 社会的意義のあるソーシャル・メディア・キャンペーンの計画及び実行

#### 講義から学んだこと

- a. 価値ある社会的課題を見つけ、ソーシャル・キャンペーンのブランディング、変化の動きを管理して、先事例や経験に目を向けることについて理解した。
- b. 各国のソーシャルメディアにおける社会的認知の促進に関し、手法として何が効果的であったかについて議論した。
- c. その他にも、クリエイティブなテクニックとして、ストーリーテリング、7枚の絵を用いた伝え方、説得の3要件やどのような緊張感を設定するかなどを学んだ。

### グループ・ディスカッションV

#### ねらい

- a. 各国政府が日本及び東南アジアの協力を一般大衆に呼びかける方法について認識する。
- b. ポスターデザインやVlogを中心としたプロモーションを制作する。

#### 活動

- a. 事後活動の対象とする社会問題に対しての大まかな方向性について、各国ごとに話し合った。各国ごとにPYは協力して、選んだ社会問題の詳細を150語の文章にして提出した。
- b. 各国で日本及び東南アジアの協力関係についての社会的認知を促進するのに用いられた方法のうち、何が効果的であったかを7枚の絵を用いた伝え方によって、議論した。参加国の内の1つをサンプルとして後掲する。
- c. いかにか視覚的に説得力を持たせるかについて再確認した。
- d. 自国における事後活動に向けた広報に取り組み、日本及び東南アジアの協力とそのメリットを伝えるポスターとVlogを共同で制作する準備をした。

#### 成果

- a. 日本及び東南アジアの友好・協力関係から生ずる戦略的コミュニケーションとパートナーシップのありがたみを感じることができた。
- b. セミナー、ウェビナー、ディスカッション・グループ、テレビ番組、政治演説、政策提言、キャンペーン、そしてソーシャルメディアなど、当該地域における社会問題の共通点や、これらの問題に対処するために採用されている効果的な方法を知ることができた。

#### (4) 成果報告

DG 5 は、メディアの概念、メディア・リテラシー、メ

ディアをツールとして使うこと、利害関係者を巻き込むこと、市民動画の制作、デジタルキャンペーンの企画・実行などを視覚情報とストーリーテリングの力を使って紹介することで、学んだ内容を共有すると決めた。さらに、PYは、Vlogや動画形式のプレゼンテーションで、自分たちの学びを創造的に表現し、「メディアDG」で学んだことを紹介しようとした。効果的に、DGの各セッションを要約し、簡潔に要点を伝えていた。こうした試みからは、PYの積極性や独自性がうかがえた。

### (5) PYの声

ディスカッション・セッションでは、何が最もよかったか

- 最も魅力的だったのはセッション2で、メディア・リテラシーとは何かということがようやく理解できたからです。ファシリテーターから渡されたシンガポールのメディア記事を読み、チーム内でディスカッションをしましたが、多様な意見が共有されました。
- 私たちをファシリテーターが新しい知識へ導いてくれた手法にほかなりません。私たちが自らのやり方で、自らの立場から、問題について調べ、議論し、追究する機会を得た後、ファシリテーターがそのセッションの総括的な結論を導いてくれました。
- ゲストスピーカーのメディアに関する話は、メディアや情報を違った角度から見ることができ、とてもよかったです。
- ここで得られた知識で、メディアという強力なツールを使って、自分の仕事と副業に応用できるような気がしています。この議題に参加できたことを本当に感謝し、幸運に思っています。
- 私が最も気に入ったのは、全PYが自国の様々な広告

やメディアを紹介した点です。このDGでの学びや得たもの、参加して自分がどう変わったかについて話し合われた。

### (6) ファシリテーター所感

このような有意義な旅路を歩むことができたのは、内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター、同僚ファシリテーターの皆様のおかげだと深く感謝している。

メディアやコミュニケーションの意義や力を実感してもらうべく、社会のためにメディア・キャンペーンをどのように行うかなど、重要なトピックについて、分かりやすく学べたり応用できるような簡単な講義を重ねました。PYは複雑なメディアの価値を理解し、すぐに戦略を実行に移すことができました。

PYの全員が、DG5のフィナーレ（ARポスター、Vlog）と成果報告会では時間の効率的な使い方を学びました。自ら手を挙げてくれた5名の発表担当者は、本物のイニシアチブを見せてくれました。私は、DG5のPY一人一人に対して、またセッションの最後に見せてくれたメンバーの力強さをとても嬉しく思っています。PYの次なる挑戦がうまくいくことを、祈っております。

## 6 日本及びASEANの経済グループ

ファシリテーター：Ms. Pannaritsara Chuenjitrabhiramon

PY：30名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

日本及び東南アジア諸国連合（ASEAN）の青年は、持続可能な開発を実現しながら、コロナ禍後の経済成長と復興を促進するため、どのような、そしてどのように、貢献・協力ができるだろうか。

### (2) 事前課題

各自、1) 自分が夢に描く仕事、2) 夢の仕事をどのように実現するつもりか、3) 自国の経済を再興させるた

めにどのように他者と協力するかについて、250単語以内でエッセイが課せられた。

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

#### ねらい

国内及び国際経済がどう成り立っているのかについての基礎的知識を得る。

## 活動

- a. PYによる自己紹介
- b. 自国の経済制度や、自国経済がどう成り立っているかについて、各参加国のPYによる紹介

## 成果

- a. 各人の背景や互いについて、知り合うことができた。
- b. 各参加国の経済について類似点や相違点を学んだ。

## グループ・ディスカッションII

### ねらい

- a. 経済の定義、経済の登場人物、経済にどのように、何を、いつ貢献したかについて、互いから学び、意見交換する機会とする。
- b. PYの足並みをそろえ、様々なレベルにおける経済の表す意味や、経済の健全性を測る指標（GDP）、経済上の道具として用いられるお金について理解を深める。
- c. 生まれた瞬間から自分は経済の一部を構成し、気付いているかどうかにかかわらず、経済は自分の生活の一部を構成していることを認識する。

## 活動

- a. 定義や経済における登場人物、また、いつ、どこで、どのように自国経済や国際経済体制に組み込まれているかについて意見を述べ合った。
- b. 自国経済の健全性に関する指標であるGDP、異なる役割を果たす異なる登場人物、経済のツールであるお金がどのような役割を果たすかについて、多種多様な意見を共有し、議論した。
- c. 自分たちがどのように経済に関わっているか、また各登場人物がどのような役割を担うかについて話し合った。

## 成果

- a. 生まれた瞬間から自分が自国経済の一部を構成しており、消費者や生産者として自国及び国際経済における重要な役割を果たしていることを学んだ。
- b. GDPという経済指標は、国家の経済について健全性を測る唯一の指標ではないのではないか、また、そうあるべきでないのではないか、と学んだ。
- c. 観光、輸出入、投資、消費、生産など日々の活動を通じて、誰もが国内及び国際経済に組み込まれていると認識した。

## グループ・ディスカッションIII

### ねらい

- a. コロナ禍以前の各国の経済状況、日本及び東南アジアのミクロ・マクロ経済への影響、各国経済の成長、国民の豊かさ、健康、生活様式、幸福度への影響について情報交換し、学ぶ。
- b. 我々の経済に対するリスクと、危機に直面した際は

前向きに考えて機会を探れるようになければならない、という意識を高める。

## 活動

- a. コロナ禍以前の個人及び国家の財やウェルビーイング、自国のミクロ及びマクロ経済に対するパンデミックの悪影響について、話し合った。
- b. パンデミックの影響から学んだ様々な教訓や、パンデミックにより各国政府がニューノーマルの施策を打ち出した中で、自分たちの生活様式をどのように適応させたか、各国政府が経済に襲いかかった危機（インフレ、失業、不況、医療制度、精神衛生の問題など）にどのように対処し、コロナ禍後に向け経済を再生させる解決法を探ろうとしたか議論した。

## 成果

- a. 危機の中に機会があること、またコロナ禍は自らの日常生活に負の影響を与えたが、適応してニューノーマルに生活することを学び、前向きに考えるようになったことを理解した。
- b. コロナ禍以前の生活や、日常生活を送る中でリスクとリスクマネジメントを意識しなければならないことを振り返り、自国及び国際経済の復興に重要な役割を果たす若きリーダーとして、パンデミックから得られた教訓について学んだ。

## グループ・ディスカッションIV

### ねらい

- a. リスクマネジメント、レジリエンス、自給自足という考え方、持続可能な開発を応用し、パンデミックを生き延びる経営を行った経営者（ゲストスピーカー）から学ぶ機会を提供する。
- b. 危機に直面したとき、これまでのものの考え方にとらわれず前向きに考えるという機会を提供し、人間の成長こそが経済発展と復興の鍵となり、社会をポジティブに変えるためには、まずは自分たちからという自覚を持たせる。

## 活動

### <ゲストスピーカー講義>

ゲストスピーカー氏名・所属： Mr. Niwat Thanpitinan, Propertist社最高経営責任者

トピック：リスクマネジメント、自給自足、人間の成長講義から学んだこと

- a. リスクマネジメントと自給自足という考え方は、ビジネスや生活を送る者であれば誰もが頭に入れておくべきことだ。あらゆる問題や危機を解決する鍵は、人づくりにある。
- b. パンデミックによって、良い産物も生まれたということから学んだ。パンデミック以前の経済下でどのように生活していたか、パンデミックが収束した後の国内・国際経済の復興において重要な役割を果た

す若手リーダーとしては何を考える必要があるかについて話し合った。

#### 成果

- a. 今後、各国が持続可能な発展を実現し、経済危機を解決する上で、リスク管理、自給自足、人づくりなどを経済計画や経済活動の一部として考慮する必要があると学んだ。
- b. 自国の経済体制下での自らの役割を自覚して、自己研鑽、自己啓発、責任ある消費者と生産者であるということが、自国経済回復の鍵だと理解した。

#### グループ・ディスカッション V

##### ねらい

- a. 持続可能な開発を実現しながらコロナ禍後の経済成長と復興を促進するために、どのように貢献・協力できるかを考える機会を、パンデミックによる教訓と併せて提供する。
- b. ディスカッションの成果をどのように発表するかについて、PYが共に考え、協力する機会を提供する。

##### 活動

- a. パンデミックから学んだことについて意見を述べ合い、また、リスク管理、自給自足、コストと利益のバランスなどといった学習内容をどのようにいのか話し合った。
- b. 日本及び東南アジアの経済成長を促進するために、PYが互いにどのように貢献し協力し合うか議論した。
- c. 発表の内容、発表準備の役割分担、発表の方法について話し合った。

##### 成果

- a. コロナ禍後における国家レベルでの経済再生には、リスク管理、自給自足、自己研鑽、協力、バランスなどが重要となると学んだ。
- b. 地域レベルでは、「日本ASEAN経済青年フォーラム」プロジェクトを起案した。これは、日本及び東南アジアの青年たちが経済やその他問題について議論し、日本及び東南アジアの経済成長及び持続可能な開発を促進すること、また将来の危機において互いに助け合うための資金を調達することを目的とした地域会議である。

#### (4) 成果報告

PYは、各回で議論し学んだ内容を簡潔にまとめ、発表した。コロナ禍が自国の経済や国際経済の循環に与えた正負の影響、パンデミックから学んだ教訓、持続可能な開発を実現しながら自国経済を再生させ、日本及び東南アジアの経済成長と復興を促進するために青年であり未来のリーダーとしてどのように貢献するか、などに焦点が当てられた。

#### (5) 自己評価

PYは、全5回にわたるディスカッション・セッションに参加して学んだこと、そして本事業によって人生観や経済に対する見方がどのように変わったかを話し合った。本事業は、経済というトピックについて新たな視点をもって理解するのに有用であった。PYは、自国の経済に貢献するために何ができるか、どのような役割を果たせるかを理解し、互いに協力し合って活動できるようになった。

#### (6) ファシリテーター所感

1. 各回1.5時間という時間配分は、長すぎずちょうどよかった。
2. ゲストスピーカーの話と交流は、PYにリーダーが平時及び危機に際してどのように行動するかについて示唆を与えるものであり、非常に有益だった。
3. ディスカッションの時間内に、PYと一緒に発表する時間を設けることで、互いの絆が深まり、協力し合う方法を学ぶことができた。

## 7 貧困と格差グループ

ファシリテーター：Mr. Rahmat Hidayat HM

PY：29名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

青年がどう貧困や格差を理解し、ニューノーマルの時代を迎えた日本及び東南アジアにおける貧困撲滅に向けていかに青年たちの参加が貢献し得るのか。

### (2) 事前課題

#### 個人課題

自分の身の回りで見受けられる貧困や格差について、ソーシャルメディア上に画像で投稿すること。この画像はPY自身で撮影したものでなければならず、インターネットから取得したものであってはならない。

#### 国別課題

自国における貧困と格差の問題に関するインフォグラフィックを作成すること。提出は事業開始前とし、セッション中にディスカッション資料として使用される。

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- 期待される成果、予定やツール類について理解する。
- ファシリテーター及び参加者について知る。
- 日本及び東南アジアの貧困・格差問題、その原因や課題について認識する。

##### 活動

- 事業及び参加者の紹介
- 日本及び東南アジアにおける貧困・格差の原因や課題についての議論
- まとめ

##### 成果

- 期待される成果、予定、議論の流れなどを理解した。
- ファシリテーターやDGの仲間たちについてよりよく知ることができた。
- 案出しを容易にするオンラインアプリのJamboardとMiroを使用して、貧困の根本原因を理解し、特定することができた。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

政治、経済、社会、健康、テクノロジーが貧困や格差にどのように影響するかを知る。

##### 活動

- グループでの振り返り及びセッションの目標
- PESTツールを用いた、貧困についての分析

##### c. まとめ

##### 成果

政治、経済、社会、健康、技術が貧困や格差にどのように影響するかを認識するようになった。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

- 貧困に影響を及ぼす可能性のある状況や文脈を予測することができるようになる。
- 草の根で展開される非政府組織（NGO）による貧困撲滅事業について理解する。
- 実現可能な政策提言を立案できるようになる。

##### 活動

##### <ゲストスピーカー講義>

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Syamsul Ardiansyah、C20議長、Dompét Dhuafa戦略ネットワークワーキング部シニアオフィサー

トピック：東南アジアにおける貧困削減プログラム：進歩、事業、課題

##### 講義から学んだこと

- 貧困は、お金がないだけでなく、健康や教育など、さまざまな形態をもって発生する。
- 貧困に立ち向かうことは、必ずしも大規模なプログラムを実施し、資金を提供するというのではなく、職能実習という形も取り得る。
- また、プログラムが賃金や消費を直ちに増やすことを保証するものでなくてもよいのである。

##### 成果

- 貧困に影響を与える可能性のある状況や文脈を予測することができるようになった。
- 草の根で展開されるNGOの貧困撲滅事業について理解した。
- 実現可能な政策提言を立案できるようになった。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- どのように政策が作られるのかを理解できるようになる。
- 政策提言を行えるようになる。

##### 活動

- グループによる振り返り及びセッションの目標
- 政策作りについての議論
- 互いの政策提言に関するフィードバック

d. まとめ

#### 成果

- a. どのように政策が作られるのかを理解できるようになった。
- b. 政策提言を行えるようになった。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

政策提言を利害関係者に説明できるようになる。

##### 活動

- a. グループによる振り返り及びセッションの目標
  - b. ライティング・ワークショップ：ポリシーペーパーの作成及び利害関係者の相関図作り
  - c. プレゼンテーションの練習及びフィードバック
- まとめ

#### 成果

PYは政策提言を利害関係者に提案できるようになった。

#### (4) 成果報告

PYは、プレゼンテーションのアイデアをまとめ、ディスカッションの結果を成功裡に報告した。内容は、貧困と格差に見受けられる問題の特定、各国及びDGの各国メンバーによって実施された、もしくはされている代替策、代替策に対する分析、その結果としての提言、そして青年の参加についてであった。報告は、PYによって大変良く行われた。

#### (5) PYの声

報告終了後に行われた最後のミーティングでは、PYが一人ずつ、自分の感じたことや自己評価を発表する機会を持った。オンライン・アンケートや口頭での評価も行われた。以下の要点は、PYの振り返りから得られたものである。

- a. 「東南アジア青年の船」青年会議が日本及び東南アジアの青年とつながる非常に良い機会であることをPYは実感したようである。最後のミーティングでは、PYの間に強い絆が紡がれ始め、感動的と言っても過言ではなかった。
- b. PYの大多数は、事業期間中に多くのことを学んだと振り返り、得た知識やスキルを勉強や仕事に役立てたいと考えている。
- c. 教育や農業など、様々な活動で地域社会を助けているDGの仲間たちの姿に刺激を受けた者もいた。
- d. 全員が、事業終了後もつながりを持ちたいと考えており、皆と直接会うことを楽しみにしている。
- e. ディスカッションの時間や事業をもっと長期のものにしてもよいのではという声も見られた。

#### (6) ファシリテーター所感

- a. PYの多くが、ディスカッションの間、積極的に活発であった。皆、とても創造的で聞く耳を持っていた。ブレイクアウトルーム・セッションは、PYについてよく知るためにとっても効果的であった。
- b. ディスカッションの時間については、やや難儀した。時間が限定的なため、調整が必要となった。
- c. 次回は、にっぽん丸においてディスカッションを担当できるのを心待ちにしている。

## 8 環境保護グループ

ファシリテーター：Ms. Valy phommachak

PY：30名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

日本及び東南アジアの青年は、どのように協力して自然環境を保護し、この地域や世界の環境問題に立ち向かえるだろうか。

### (2) 事前課題

- 自国の環境に関する状況（差し迫った課題、保護手段、解決策）を探ること。
- Econews Laosと共同で記事を執筆すること。またその記事を#DG8、#BeTheChangeというオンライン・コミュニティに公開すること。

記事の一例は以下の通り：

<https://www.econewsloas.com/what-is-climate-change-and-how-is-philippines-affected/>

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

ねらい

- PY全員が互いを知りあうことが主目的である。
- 議題について説明する。
- ストーリーテリングを用いて、日本及び東南アジアの環境課題について紹介する。
- 国別のプレゼンテーションというDG8のグループ課題について説明する。

#### 活動

- アイスブレイク及び自己紹介。一人ひとり、自分の情熱や自分自身の話をDG8の仲間たちに伝える。
- 地球環境問題に関する導入プレゼンテーションがファシリテーターによりなされた。
- ブレイクアウトルームに分かれての議論：
  - 世界で起こっている環境問題で最近耳にし、仲間のPYに伝えたいことは何か。
  - あなたの国やコミュニティで最も差し迫ったの課題は何か。我々自身で貢献できることは何だと考えるか。

#### 成果

- 自己紹介には時間を割き、PYは全体で話す機会を得たことで、セッション中に発言する背中を押すことにつながった。
- 地球環境問題について知識を得て、議題に関して詳しくなった。
- 世界や自分たちの地域で起こっている優先順位の高い環境問題について、自らの考えを話し合う機会を

持てた。

#### グループ・ディスカッションII

ねらい

- 日本及び東南アジアにおける問題について調べ、分かったことを発表
- 各参加国における解決策やベストプラクティスについての振り返り
- 議論を通じて、批判的思考や人前で話すスキルを涵養

#### 活動

- アイスブレイク：PYについてのクイズを行い、与えられた事実からそれが誰に関するものなのかを当てた。
- クイズアプリKahoot!を用いたゲーム：プラスチックについての知識をテストした。
- 国別発表：カンボジア、タイ、日本、ブルネイ、ミャンマー
- ブレイクアウトルームに分かれて議論：
  - 今日取り扱ったのはどのような問題だったか、またそれらは優先的に解決されるべきか。
  - 応用・実行できるベストプラクティスは何か。
  - どのような見込みや課題があるか。

#### 成果

- お互いをよりよく知り、チームワーク、プレゼンテーション、スピーチ、批判的思考など、重要なソフトスキルを訓練できた。
- 日本及び東南アジアにおける差し迫った環境問題について、PYの仲間からより多くの示唆を得ることができた。

#### グループ・ディスカッションIII

ねらい（グループ・ディスカッションIIから連続）

- 日本及び東南アジアにおける問題について調べ、分かったことを発表
- 各参加国における解決策やベストプラクティスについての振り返り
- 議論を通じて、批判的思考や人前で話すスキルを涵養

#### 活動

- 国別プレゼンテーション：インドネシア、フィリピン、マレーシア、ラオス
- 日本及び東南アジアにおける喫緊の環境問題や環境保全の取組に関する議論

**成果**

- グループワークを通じて、互いの距離を縮め、チームワーク、プレゼンテーション、スピーチ、批判的思考力といったスキル向上の機会とできた。
- 日本及び東南アジアにおける差し迫った環境問題とその解決策について、より多くの情報を得た。
- 質問・意見する機会を増やすことができた。

グループ・ディスカッションIV**ねらい**

- PYの国別プレゼンテーションの続き
- ゲストスピーカーの実体験を学ぶ。
- プロジェクト案がどのように計画され、練られ、実行されるのかについて振り返りを行う。

**活動**

- 国別プレゼンテーション：シンガポール、ベトナム
- ゲストスピーカーによるプレゼンテーション
- 最後のグループ活動について説明し、プロジェクト立案のためのツールについて紹介がなされた。

**成果**

- シンガポール及びベトナムにおける環境問題と環境保全についての知識を深めた。
- PYによる質疑の時間をとり、全体でのコメントを行った。
- ゲストスピーカーの実体験を聴いて学ぶことができた。
- プロジェクトを計画する際のツールを携えることができ、自分たちのグループワークにどう使用するかを学んだ。

**<ゲストスピーカー講義>**

ゲストスピーカー氏名・所属：Mr. Korakot Tanseri、国際連合開発計画（UNDP）駐ラオス代表事務局エクスペリメンテーション部部長

トピック：ゲストスピーカーのプロジェクトや、グローバル・シェイパーズのコミュニティ及びUNDPを通じた運動による前向きな変化について

**講義から学んだこと**

- グローバル・シェイパーズのコミュニティで行った運動から見た、コミュニティが抱える問題に対して解決策を見出す方法
- 課題の定義や解決策の設計をはじめ、UNDP駐ラオス代表事務局による環境保護プロジェクトについて話を聞き、示唆を得ることができた。
- ゲストスピーカーの話から、自分たちが環境問題への取り組みについて何ができるかを考えさせられた。

グループ・ディスカッションV**ねらい**

- プロジェクトを計画するツールを用いて、自分たちのプロジェクトについて議論・立案する。

- レバレッジ・ピッチング・テクニックを学んで、実践する。
- 批判的思考やスピーチを訓練する。

**活動**

- Slidoを用いてPYの考えを浮き彫りにした。
  - DG 8から何を学んだか。
  - DG 8の仲間たちに何を伝えたいか。
- プロジェクト提案の一助とするべく、レバレッジ・ピッチング・テクニックを紹介した。
- 6つのPYチームによるプロジェクト提案

**成果**

- 限られた時間の中で、優先的に取り組むべき課題、重点的に取り組むべき解決策、利用可能な資源、目の前の課題、プロジェクトの実施やスケジュールについて議論した。
- 創造的で詳細なスライド及び大胆なプロジェクトの提案を考えることができた。
- 事業期間中に学んだことを振り返る機会を持てた。

**(4) 成果報告**

- ・ チームで協力して、本事業で学んだこと、得たことを振り返り、優れた成果について話し合うことができた。
- ・ 相手に話を伝え、発表するスキルを発揮することができた。
- ・ 発表者となったPYは、自発的に作業し、他の28人のPYからアイデアを集めて代表として報告したため、リーダーとしてのスキルを磨くこともできた。

**(5) PYの声**

DG 8のPYへ行ったアンケートでは、その大半が、セッションが包括的で楽しいものだったと考えていた。しかし、自分の考えを述べる時間が十分でなかったという。PYとしては、願わくばディスカッションの時間をもっと長くし、また、意見を集約し互いの解決策を議論する上で対面でのセッションが非常に有効であるとのことだった。

さらに、つながりや友情が生まれたという意見に全員が同意しており、DGセッションにおおむね満足していることがわかった。また、ファシリテーターの知識が豊富だった、サポートが充実していた、わかりやすかったなど、全員が平均して「良い～非常に良い」（4～5点）をつけていた。

最後に、ゲストスピーカーは本ディスカッションの議題に関連しており豊富な知識を持っていたという意見で一致していた。

**(6) ファシリテーター所感**

念願だったSSEAYPのファシリテーターとして初め

て参加し、多くのことを学べたことに光栄で身の引き締まる思いである。PYの皆さん、ファシリテーターの仲間たち、事務局の皆様から多くのことを学んだ。このような貴重な経験をさせていただき、皆様に感謝している。この貴重な学びを胸に、将来はもっと強く、もっと有能なファシリテーターになって戻ってきたいと思う。

DG8の皆さん、大好きです！

## 9 ソフトパワーと青年の民間外交グループ

ファシリテーター：皆川佳也

PY：28名

### (1) ディスカッション・トピックの論点

地球市民として、自身の住むコミュニティや世界をより良い場所にするために、そして人々へ影響を与えるために自身がとるべきアクションとは。

### (2) 事前課題

#### 読書課題

PYはソフトパワーと青年の民間外交に関する課題図書を与えられた。

#### 国別課題

PYは青年民間外交に関連したプログラムを調査し、プログラムのミッションステートメント、目的やゴール、活動、結果、プログラムを調査対象にした理由を発表するよう課題を与えられた。

#### 個人課題

PYはワークシートの記入及びレポート作成等に関する課題を与えられた。内容は以下の通り：

- “Who am I” ワークシート
- “Value Lens” ワークシート
- 「青年の民間外交」と「ソフトパワー」に関する定義
- ポップカルチャー、サブカルチャー、ソーシャルメディア、伝統、歴史がソフトパワーと青年の外交にどのように影響するか調査し、自身の意見を共有する。

### (3) 活動内容

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- DG9グループ内のプラットフォームと文化形成
- アイスブレイキングアクティビティ
- 異文化の環境で自身を紹介する方法を学ぶ。
- 異文化の環境において適切な振る舞いを学ぶ。

#### 活動

- ファシリテーター自己紹介
- グラウンドルールの説明
- ゴール及び目的の説明
- ワークシートの記入方法及びグループ・ディスカッションに用いる資料に関する説明
- 個人課題に関する説明

#### 成果

- PYはワークシートを用いて、決められたフレームワークに沿って自己紹介する方法を学んだ。
- グループ内において英語を第二か国語とするメンバーたちが安心して発表ができる場作りを目的にグラウンドルールを設定した。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- 「文化」のコンセプト及び複雑さを学ぶ。
- 文化価値観を共有してお互いを知る。
- 他のメンバーから共有される異なる視点を知る。
- 文化、価値観、視点が自国及び他国によって異なることを認識し、さらなる意識を高める。
- 「ソフトパワー」と「青年民間外交」の意義を学び、直面している課題を理解する。
- 上記のコンセプトを用いて、変化に向けて促進できるか検証する。

#### 活動

- 文化モデルの紹介
  - 「文化」の定義
  - Geert Hofstedeによる “Cultural Onion Model”
  - Edward T. Hallによる “Tip of the Iceberg”
- グループ別による “Values Lens Sheet” についての

ディスカッション

- c. グループ全体にて個別課題についてディスカッション
  - 「ソフトパワー」及び「青年民間外交」の定義を明確にする。
- d. ディスカッション・トピックについてグループでディスカッション

**成果**

- a. 文化モデル、文化の複雑さ、人々の価値観が文化・コミュニティ・国籍によって異なることを学んだ。
- b. 自身のレンズや視点だけで相手を一方的に判断しないことの必要性を学んだ。
- c. ソフトパワーと青年外交の定義を学んだ。
- d. ソーシャルメディアとポップカルチャーがソフトパワーに与える影響を学んだ。
- a. ソフトパワーとハードパワーの基準について学んだ。

グループ・ディスカッションIII

**ねらい**

- a. 国別による青年民間外交における取組について共有する。
- b. 各国の背景及び抱える問題について共有し、認識と理解を深める。
- c. 民族、経済、その他のサブグループが経験する課題を理解する。

**活動**

- a. グループ・ディスカッションIIの要約及び補足
- b. 国別発表 Part I
  - ブルネイ: Diplomat for a Day
  - カンボジア: Young Southeast Asian Leaders Initiative (YSEALI) Academic Fellowship Program
  - インドネシア: Indonesian Youth Diplomacy (IYD)
  - ラオス: Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths (JENESYS)
  - マレーシア: Yayasan Sukarelawan Siswa (YSS)/ Student Volunteers Foundation
  - ミャンマー: Media Art
- c. 発表に関するコメント、質疑応答
- d. プレゼンテーションに関する補足、量的・質的調査に関するガイダンス

**成果**

- a. 各国で実施されている青年プログラムについて学んだ。
- b. プログラムの結果について共有した。
- c. プログラムの賛否及び課題について学んだ。
- d. 調査する際のデータ分析の必要性について学んだ。

グループ・ディスカッションIV

**ねらい**

- a. グループ・ディスカッションIIIからの続き

- b. DG9グループでのグループワークの実践
- c. リサーチスキル及び分析スキルの向上
- d. 大人数によるグループでのグループワーク、チームワーク向上

- e. ロジスティックス及びタイムラインの設定の必要性
- 活動**

- a. 国別発表Part II
  - 日本: Tobitate! (Leap for Tomorrow) Study Abroad Initiative
  - フィリピン: Northern Illinois University (NIU) Philippine Youth Leadership Program (PYLP)
  - タイ: Asian Law Students Association (ALSA) Law Societies
  - ベトナム: Voluntary Agency Network of Korea (VANK)
- b. 発表に関するコメント、質疑応答
- c. 全体報告会に関するインフォメーションセッション
  1. 成果発表に関する説明
  2. 二人のリーダーをプロジェクト進行役として任命
  3. タイムテーブル
  4. 進行方法
  - 5.ブレインストーミング及びアイデア出し

**成果**

- a. グローバルスケールで実施されている青年プログラムについて学んだ。
- b. Miroを使用してアイデア出しとブレインストーミングを行った。
- c. 新たに学んだ知識と結果の振り返りを行った。
- d. DG9グループの成果発表プレゼンテーションの役割分担を決定した。

グループ・ディスカッションV

**ねらい**

- a. グループ・ディスカッションIVからの続き
- b. 英語を第二言語する者がパブリックスピーチを行う際の心得について

**活動**

- a. ブレインストーミングとプレゼンテーションのアウトラインのドラフトを共有
- b. プレゼンテーション準備に伴う役割を決定
- c. プログラム終了後の将来のプロジェクト及び目的についてのディスカッション

**成果**

- a. ソフトパワーと青年外交の重要性について学んだ。
- b. ディスカッションを通じて、相互理解を深めること、つながりを確立することの大切さを学んだ。
- c. プレゼンテーションで発表するプロジェクト内容を発足させた (Digital Gastro Diplomacy Approach)。

#### (4) 成果報告

DG9のPYは成果報告会にてグループ・ディスカッションを通じて学んだソフトパワー、青年の民間外交、文化、そして価値観の定義を紹介することにした。国別発表で行われた10の青年プログラムの調査研究を紹介した。文化モデルの一つである、“Cultural Onion Model”が紹介され、個々の形成は複雑な文化背景が影響していることを説明した。

さらに、PYは「食」がソフトパワーのツールとして用いることが有効であるというクリエイティブなアイデアに加え、ソーシャルメディアとの融合を提案した。DG9グループは“Digital Gastro Diplomacy Approach”と題し、参加国11ヶ国を代表する食べ物を紹介した。

このキャンペーンでは、ソーシャルメディア、ネットワーキング、そして各国の“Gastro Identity”の活用による相互理解の促進が重要なポイントであった。

#### (5) PYの声

- 学んだいくつかの文化モデル (Cultural Onion Model と Tips of the Iceberg Model) は文化の複雑さを知ることができ、「本のカバー、うわべだけで全てを判断してはならない」と理解を深めることができた。
- DG9で得た学びを通して、青年リーダーとしての自分自身の内なる旅をもたらした。自身のコンフォートゾーンから抜け出て、リーダーとして振る舞うことは貴重な経験となった。他のリーダー達にも是非奨励したいと思う。
- プログラムを通じて、物事をあらゆる角度から分析することの大切さに加え、異文化間の視点をさらに高めて物事を受け入れる必要性を学んだ。
- ソフトパワーは正しく扱われれば、海に大きなさざ波を起こすほどのパワフルな武器である。そして、知識に向けて光を灯し、青年達が持つべきいまつてもある。その炎は多くの誤解や断絶され覆われている地球を燃やして、本来の姿を表すことすら可能である。

#### (6) ファシリテーター所感

最初に内閣府、青少年国際交流推進センター、仲間のファシリテーター達のAaron、Iche、Tong Tong、Zenn、Jed、Ning、Mato、Jinnyに心から感謝を申し上げる。

そしてDG9の大切なPYへたくさんの感謝を。DG9グループにおいて最初に取り組んだことは、思いやりを持ち、必要な時は手助けをする、批判をせず、気を配り、尊敬しあうというPY全員にとって安心できる場作りをすることだった。

いくつかの機会を通じてお互いが思いやる場を見守る

ことができた。中でもPYの一人がヘルプを求めた際にグループのメンバーが手助けをするといった機会を見れたときは、とても心が温まる瞬間だった。課題の量はチャレンジであったかもしれないが、PYは努力をし、真摯に取り組んだ姿勢はとても素晴らしかった。

多くのPYは英語を第二言語とするため、コンフォートゾーンから出なければならぬということを認識していたが、彼らはそんな状況下でも、勇敢に課題をこなし、調査を発表している姿は大変誇らしかった。

ソフトパワーと青年の民間外交について理解を深めるにあたり、異文化コミュニケーションをテーマとした講義を行った。講義では文化、価値観の共有、そしてアイデンティティがグローバル社会を形成するには大切な役割を担うことを説明した。例えば、文化モデルの一つであるCultural Onion Modelを紹介することでPYはレイヤー層にまたがって文化が複雑に形成されていることを学んだ。

“Tip of the Iceberg”モデルでは深いレベルで相手を見ること、つまりうわべや表面だけで判断しないことを学んだ。全体の講義を通じてPYは異文化理解を深め、忍耐強く、相手を一方的に決めつけないことを学んだ。

成果報告の準備を通じて、PYは大きなグループでは役割分担やロジスティクスを設定することが効率的に機能することを学んだ。

自主的にリーダーに名のり出てくれた二人のPYはイニシアチブを取り、限られた時間内にグループを取りまとめてくれた。

同時に多くのPYが自分たちのアイデアやスキルを貢献してより良いプレゼンテーション準備に取り組んだ。そして、何よりもPYによる食を通じての“Gastro Diplomacy”という提案はクリエイティブで目を見張るものだった。

DG9のPY、そしてセッションの終盤に向けて見せた彼らのエンパワーメントをこの上なく誇りに思った。今後の将来の幸運を祈ると共に努力が実るよう心から応援する。